

# 果樹関係用語の解説(2)

北海道農業試験場 園芸作物第1研究室長

西山保直

**共台** つぎ木で台木はつぎ穂と近縁な植物が利用されているが、つぎ穂と同一種類の植物、またはその実生を台木とする場合をとくに共台という。また実生を台木としたとき**実生台**ということもある。

**中間台木** より経済性の高い品種を、栽培している樹に高つぎし、年数を経ると、古い品種の枝が取除かれて高つぎした品種で樹が構成されるようになる(高つぎ更新)。この時、台木と高つぎ品種の間に古い品種の部分が存在することになり、この古い品種の部分(幹や、枝のみになっている)を中間台木とよぶ。近年、はじめからわい性台木を中間台木として用いて二重につぎ木し、わい性樹を作る試みがなされている。

**台負け、台勝ち** つぎ木した果樹を長年月栽培していると、台木とつぎ穂の間での発育量の差が蓄積して、つぎ木の接合部を境にして幹の太さに大きな差が出来る場合がある。このとき台木が穂より小さいとき台負けといい、逆に台木が大きいときは台勝ちとなる。リンゴで、ミツバカイドウ台木の台負け、マルバカイドウ台木の台勝ち、よく知られている。

**偶発実生** 実際に栽培されている果樹園や、その他の樹園地などで、偶然に発見された優良な形質をもつ実生樹と云うことで、科学的にまた人為的に交配していないので両親は不明であるのが普通である。第二次世界大戦以前より栽培されている主要果樹の主要品種は、ほとんど偶発実生である。例えば、温州ミカンは、明治初期あるいは、それ以前に鹿児島県で発見された偶発実生、リンゴの旭はカナダで、ゴールデンデリシャスはアメリカで、印度は青森県でそれぞれ発見された偶発実生である。

**枝変り** 植物体の一部に体細胞の遺伝子突然変異が生じて他の部分と形質の異なる部分が生ずることで、芽条突然変異と呼ばれることがある。果樹の場合枝葉の形態的変異より、果実の形質の変異をとくに重視し実用価値の高い品種が得られることが多い。ミカンの早生温州、リンゴのスターキングデリシャスなどはその例である。

## 栽培関係

**せん定** 樹を自然の繁茂にまかせておくと樹高が高くなったり、枝が重なり合って内部の枝への日照が不足になったりして、花芽の着生が劣ったりする。それで、自然の樹姿にいちじるしくさからわかない範囲で枝を取り除き、枝の量を加減し、隔年結果、樹枝の枯死などを防ぐことをいう。なお、摘果、収穫、薬剤散布などの管理作業に便になるよう樹形を整えることは**整枝**と称されるが、一般に、整枝とせん定とは関連連しながら同時に行なわれるので、往々、せん定とは、整枝とせん定の両作業を含んだ意で習慣上使用されることがある。

整枝、せん定の目的は、管理作業に不便を生じないよう樹形を整え、樹体各部に日光が均等にゆきわたるようにし、樹体の栄養生長と生殖生長とを均衡させ、隔年結果の防止、樹の老化を防ぎ、良品質の果実を多収することにある。

せん定には、実施する時期により、冬季せん定、夏季せん定、やる方法により、間引せん定、切返しせん定、更新せん定などに分けられる。

**発育枝** 花芽をつけていない枝を称し、とくに生長が盛んなものを**徒長枝**という。

**結果枝** 花芽をつけている枝をいうが、

(1)モモ、ウメ、スモモなどの結果枝のように花芽が花序または花蕾のみから出来ているもの。

(2) ミカン、カキ、ナシ、リンゴのように花芽が花序または花蕾と葉序とを含んだ混合芽から出来ているものの2種類に大別される。

さらに結果枝を長さによって区分し、短果枝、中果枝、長果枝と区分することが、リンゴなどでは普通に行なわれている。

**スパークタイプ** リンゴで、発育枝がそれほど伸長せず、短果枝が非常に沢山着生し、全体として樹がわい化する性質の枝変りを総称する。昭和20年代の後半から、つぎつぎにアメリカで発見され、わが国へも多数導入され、各地で試作されているが、食味などに問題点があり、まだ定まった評価はない。

**かき根仕立て**(ヘッジロートレイニング) 果樹の仕立て方の一つで、樹を並木植えて密植にし、かき根のように仕立て、列間の方向からのみ管理作業をする栽培法である。

従来の果樹の栽植、仕立て方は、正方形植え、矩形植え、強勢樹が主であった。この方法では樹の四方から管理作業が出来る利点はあるが、通路の割合が大きくなる欠点があった。近年わい性台木の研究と普及が進むにつれて、欧米のリンゴ栽培では、密植により収量をあげ、わい性樹をかき根仕立てにして、列間の方向から機械作業を主とした省力栽培を実施しようとする試みが行なわれている。